

1. 発育研究の学際的意義

発育に関する学問的体系は未完成である。しかし、既成の学問分野において、それぞれの立場から研究が進められているため、その学際的意義は極めて大きい。

(1) 発育の概念とその研究分野

(2) 発育研究における学際的傾向とその意義

2. 形態発育と機能発達との関連性

形態と機能は決して独立に論ずべきものではない。両者の関連性を総合的に理解しそれぞれの専門分野における研究者相互の協調が最近の新しい方向である。

(1) 発育研究における形態と機能の総合的理解

(2) 生理的現象としての身体発育

3. 個人追跡の必要性和集団観察による情報の処理

発育研究にとって、その研究対象を個人追跡として扱うか集団の一時的観察として扱うかにより、解析方法が異なるのは当然である。

(1) 縦断的研究の重要性和最近の動向

(2) 集団観察における性差および個人差の理解

(3) 発育急進期における資料解析の問題点

4. 発育現象のメカニズムと発育の予測

発育現象のメカニズムを生理学的に解明するためには、小児生理学、内分泌学などの進歩にたよらねばならない。この方面に関する研究は急速な進歩をとげている。

(1) 成長ホルモンと発育現象のメカニズム

(2) 生理学的年齢と発育の予測(個人レベル)

5. 発育の年次的推移と地域性の問題

集団的にみて、体位がどのように変化して現在にいたり、また、今後どのように変わっていくかを検討することは、地域性との関連において非常に実質的な課題である。

(1) 年次的推移と体位の予測(集団レベル)

(2) 地域差の問題と発育に影響する因子

6. 発育に影響する因子と発育研究の問題点

発育に影響する因子は、古くて新しい問題であるため最近でも多くの検討がなされているが、今後は新しい統計的技法を応用して着実な研究が進められるべきであろう。また、同時に、発育研究の成果が小児の健康と幸福に結びつくことを目途として研究の方向が設定されるべきである。

(1) 遺伝的要因と環境的要因

(2) 現象の理解と発育研究の限界

(3) 発育評価と関連諸科学との関連